星々の輝きがひときわ目映い夜、珍しい客がやってきた。
吸血鬼だ。
人間とよく似た姿をしているが、眼と口を見れば一目瞭然。細長い瞳孔と黄金の虹彩、唇から覗く鋭い牙が特徴だ。
「博士でいらっしゃいますか？」
「うんそう、私が博士。大抵のことはなんでも出来る博士。でも出来ないこともある。例えば――」
吸血鬼がしっかりと抱えている大きな荷物に視線をやりながら、少し勿体ぶってその言葉を紡ぐ。
「死んだ命を生き返らせるとか」
思った通り、吸血鬼の眼が驚きに見開かれた。
「君は吸血鬼だね、そっちは」
「この子を、生き返らせていただきたくて、こちらへ参りました」
吸血鬼は、荷物に掛かっていた布を一部取り払った。中から出てきたのは、私の予想に反して人間の子どもだった。正確にいうと、人間の子どもの死体だ。
「安らかな顔だね、眠ってるみたいだ」
「間違いなく死んでいます。全身を凍らせているので腐敗は進んでいませんが」
堅苦しい訂正に、私はちょっと苦手なタイプだなぁと思いつつ、疑問を口にした。
「吸血鬼ってのは人の血が主食だろう？　なんで人間の子を生き返らせたいんだい？　いや、そもそも死なせたくなかったなら眷属にすれば良かったのに」
吸血鬼は人間の――いや、確か人間じゃなくても哺乳類ならいいって聞いたこともあったような……まぁとにかく、主食は人間の血液だから、基本人間は食料にしか見えないって聞いたけどね。しかも子どもは新鮮な分おいしくてエネルギーも得やすいって。
あ、もしかして。
「家畜として飼ってたのかい？　それで」
間違って死なせちゃったとか？　って続けるつもりが、吸血鬼の眼が燃えるように輝いたので、後半は口にふたを

して言葉になるのを防いだ。
うっわー怒ってる。
「えぇっと、すみません……」
とりあえず謝っとく。久しぶりの客だ。最終的に依頼を断ることになったとしても、もうちょっと会話を楽しみたい。
吸血鬼は、一度まぶたを閉ざし、開いた。最初の、普通の眼に戻ってる。怒りを抑えてくれたらしい。
「この子は、私が育てました。生まれてすぐ捨てられていたところを拾って、それから、人間の社会に紛れて、人間の子どもとして、育ててきました」
「ってことは、赤ん坊から？」
「はい」
「そりゃあすごいね！」
正直驚いた。人間は一人で生きていけるようになるまでの時間が、他の生物に比べてとてもかかるのだ。それを赤ん坊から育てるとは。
まぁでも吸血鬼は寿命ないし、人間は長くても百歳ぐらいまでしか生きないから暇つぶしには持ってこいか、と思ったことはかろうじて口に出さなかった。
「博士が以前、人間を生き返らせたことがあると、長から伺ってこちらに参りました」
吸血鬼って老いがないから物忘れもないんだよねーと少しだけ昔のことを思い出しながら口を開く。
「確かに。昔々の大昔、あのクソ面倒臭い吸血鬼の長殿の依頼で人間を生き返らせたことがあったよ」
吸血鬼の頬に、ほんの少し赤みが差した。
あぁそうか。この吸血鬼、大分人間の血を、食事をしていないのか。そんなことを思いながら、次の言葉を告げる。
「生き返らせられるのは人間の時間で七日間だ。永遠じゃない。永遠をお望みなら、神や悪魔に頼んでもらうしかないね」
言いながら、吸血鬼はそれを承知でここに来たのだろうとも思った。それこそ永遠を望むなら、彼らの眷属にすれ

ばいいのだ。命があるうちでないと効果はないので、間に合わなかった可能性もあるが、たぶんそうじゃない。
「七日間」
吸血鬼は呟き、子どもの顔を見た。
人間の子どもなんてもう何十年、下手したら何百年も見ていないから、この子がどのくらいの年齢なのかわからない。
「わかりました。お願いいたします」
吸血鬼は、子どもを抱きしめたまま、頭を下げた。
これには少しばかり驚いた。彼の種族は無駄に誇りばかり高くて面倒臭い奴らだと思っていたよ。頭を下げるなんて、この吸血鬼はそれほど人間社会に毒されているのかな。
ま、私もちょうど退屈してたところだからいい気分転換になるさ、ってことは黙っておく。
生真面目そうだし、あまり追い詰めないでおこう。
「一つだけいい？　なんでこの子を生き返らせたいの？」
吸血鬼の顔が強張った。
「私は自分の研究が試せるならそれでいいんだけどね。もしも君に情があってこの子を生き返らせるというのなら、君はこの子に二回目の死を与えることになる。その覚悟はあるのかなって」
吸血鬼に寿命はないが死の認識がないわけではないし不死でもない。これは私としても興味がある。吸血鬼にとって、死とはなんなのだろう。
「少し長くなりますが、聞いていただけますか？」
喜び勇んでメモを取りたい気持ちを抑えつけ、私は神妙に頷いた。

→→→つづきは
《おねショタ》アンソロジー『∞-infinity-』で！